

Oracle® Web Services Manager

インストール・ガイド

10g (10.1.3.1.0)

部品番号 : B31904-01

2006 年 12 月

『Oracle Web Services Manager インストール・ガイド』には、Oracle Web Services Manager を Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) とは統合されていないスタンドアロンのアプリケーションとしてインストールするための情報が記載されています。Oracle WSM を Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) の一部としてインストールする場合は、『Oracle Application Server インストール・ガイド for Microsoft Windows』または『Oracle Application Server インストール・ガイド for Linux x86』を参照してください。

Oracle Web Services Manager インストール・ガイド, 10g (10.1.3.1.0)

部品番号 : B31904-01

原本名 : Oracle Web Services Manager Installation Guide, 10g (10.1.3.1.0)

原本部品番号 : B31006-01

原本著者 : Ellen Desmond

Copyright © 2006 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万が一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle, JD Edwards, PeopleSoft, Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性がります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	vii
対象読者	viii
ドキュメントのアクセシビリティについて	viii
関連ドキュメント	viii
表記規則	ix
サポートおよびサービス	ix
1 インストールの概要	
スタンドアロン・インストール	1-2
スタンドアロン・インストールのモード	1-2
アプリケーション・サーバーおよびデータベース	1-3
インストール手順の要約	1-3
2 要件	
システム要件	2-2
グローバリゼーションおよびフォント	2-2
ポート	2-3
インストール・ユーザー	2-3
環境変数	2-4
3 インストール・タスク	
拡張インストール用のデータベースの準備	3-2
インストール・プロセスの開始	3-3
Oracle インベントリ・ディレクトリ	3-3
Oracle Web Services Manager のインストール	3-4
Oracle WSM の削除	3-8
4 インストール後のタスク	
基本インストール後の Oracle WSM サーバーの再起動	4-2
バックアップおよびリカバリの実行	4-2
SSL の有効化	4-2
地域および言語の設定	4-2
JSSO の有効化	4-3
次に実行する内容	4-3

A サイレント・インストールおよび非対話型インストール

サイレント・インストール	A-2
非対話型インストール	A-2
インストール前	A-2
レスポンス・ファイルの作成	A-3
インストーラの記録モードを使用したレスポンス・ファイルの作成	A-3
レスポンス・ファイルで変更する変数	A-3
レスポンス・ファイルの例	A-4
インストールの開始	A-7
インストール後	A-8
サイレント・インストールおよび非対話型インストールのセキュリティ上のヒント	A-8
削除	A-8

B インストールのトラブルシューティング

インストールの内容	B-2
問題の解決	B-2
インストーラが表示されない	B-2
インストール中の接続の問題	B-2
失敗後のインストールの再開	B-3

C サード・パーティ・ライセンス

索引

図一覧

3-1	Oracle WSM のインストール画面	3-4
3-2	プロキシ情報の指定	3-6
3-3	「インベントリ」パネル	3-8

表一覧

1-1	基本インストールおよび拡張インストールの特徴	1-3
2-1	システム要件	2-2
2-2	Oracle WSM のデフォルト使用のポート	2-3
2-3	環境変数の要約	2-4

はじめに

『Oracle Web Services Manager インストレーション・ガイド』には、Oracle Web Services Manager を Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) とは統合されていないスタンドアロンのアプリケーションとしてインストールするための情報が記載されています。Oracle WSM を Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) の一部としてインストールする場合は、『Oracle Application Server インストレーション・ガイド for Microsoft Windows』または『Oracle Application Server インストレーション・ガイド for Linux x86』を参照してください。

対象読者

このマニュアルは、Oracle Web Services Manager のスタンドアロン・インストールを実行する管理者を対象としています。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。

関連ドキュメント

詳細は、Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) ドキュメント・セットの次のドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Application Server インストール・ガイド for Linux x86』
- 『Oracle Application Server インストール・ガイド for Microsoft Windows』
- 『Oracle Web Services Manager 管理者ガイド』
- 『Oracle Web Services Manager デプロイメント・ガイド』
- 『Oracle Web Services Manager アップグレード・ガイド』
- 『Oracle Web Services Manager 拡張ガイド』

表記規則

このマニュアルでは次の表記規則を使用します。

表記規則	意味
太字	太字は、操作に関連する Graphical User Interface 要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック	イタリックは、ユーザーが特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、 URL 、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

インストールの概要

この章の内容は次のとおりです。

- [スタンドアロン・インストール](#)
- [スタンドアロン・インストールのモード](#)
- [アプリケーション・サーバーおよびデータベース](#)
- [インストール手順の要約](#)

スタンドアロン・インストール

Oracle Web Services Manager は、Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) の一部としても、またスタンドアロン製品としてもインストールできます。このマニュアルには、Oracle WSM をスタンドアロン・アプリケーションとしてインストールするための情報が記載されています。Oracle WSM を Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) の一部としてインストールする場合は、『Oracle Application Server インストール・ガイド for Microsoft Windows』または『Oracle Application Server インストール・ガイド for Linux x86』を参照してください。

スタンドアロン・インストールのモード

10g (10.1.3.1.0) の Oracle WSM には、「基本」と「拡張」という 2 つのインストール・モードがあります。インストール中に入力した情報によって、Oracle Universal Installer で使用するモードが決まります。インストール中に、Oracle Web Services Manager 10g (10.1.3.1.0) をインストールするディレクトリを指定します。新規ディレクトリを指定すると、Oracle Universal Installer は基本インストールを実行します。既存の Oracle ホームを指定すると、拡張インストールを実行します。どちらのモードでも、すべてのコンポーネントが同一のマシン上にインストールされます。基本インストールと拡張インストールには異なる特徴があります。

- **基本:** 自己完結型の Oracle WSM のデプロイを作成するにはこのモードを使用します。このモードには Oracle Containers for J2EE が含まれます。Windows の場合、このモードには、データベースとして Oracle Database Lite のデフォルト・バージョンも含まれます。Linux の場合、このモードでは Oracle Database をインストールしておく必要があります。この簡易デプロイは練習、実証および実働前のデプロイに適していますが、完全な本番環境には向いていません。
- **拡張:** このモードでは、Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) を含む既存の Oracle ホームに Oracle WSM をインストールできます。Oracle WSM の拡張インストールを実行する場合は、既存の Oracle Database を指定する必要があります。1 つのホストに Oracle WSM をインストールすると、他のホストに Oracle WSM のインスタンスを追加して、Oracle WSM のデプロイを拡張できます。それぞれのホストの Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) を含む既存の Oracle ホームで拡張インストールを実行し、既存の Oracle Database を指定してください。

注意: Oracle WSM の基本インストールおよび拡張インストールは、それぞれ開発者インストールおよび本番インストールと呼ばれることがあります。

注意: 『Oracle Application Server インストール・ガイド for Microsoft Windows』または『Oracle Application Server インストール・ガイド for Linux x86』に記載されているように、Oracle ホームには Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) の拡張インストールが含まれている必要があります。拡張インストールには Oracle SOA Suite の全体ではなく、J2EE のみが必要です。

注意: 既存の Oracle Database が必要なインストールでは、次のバージョンがサポートされています。

- Oracle9i Database リリース 2 (9.2.0.7) 以上
 - Oracle Database 10g リリース 1 (10.1.0.5) 以上
 - Oracle Database XE (10.2.0.1)
 - Oracle Database 10g リリース 2 (10.2.0.2) 以上
-

表 1-1 に、Oracle WSM の基本インストールおよび拡張インストールの特徴をまとめます。

表 1-1 基本インストールおよび拡張インストールの特徴

	基本	拡張
指定する Oracle ホーム	新規ディレクトリ	Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) を含む既存の Oracle ホーム。
Linux 上のデータベース	既存の Oracle Database が必要	既存の Oracle Database が必要
Windows 上のデータベース	Oracle Database Lite をインストール	既存の Oracle Database が必要
その他のソフトウェア	Oracle Containers for J2EE をインストール	既存の Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) のコンポーネントを使用

アプリケーション・サーバーおよびデータベース

Oracle Web Services Manager 10g (10.1.3.1.0) では Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) のみがサポートされています。

Oracle Web Services Manager 10g (10.1.3.1.0) では Oracle Database および Oracle Database Lite のみがサポートされています。Oracle Database Lite は Windows 上での基本インストールに含まれています。Linux 上での基本インストールまたはいずれのプラットフォームでの拡張インストールの場合は、既存の Oracle Database を指定する必要があります。

インストール手順の要約

- 次のマニュアルで、Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) および Oracle Web Services Manager の最新情報を確認します。
 - 『Oracle Application Server リリース・ノート for Linux x86』
 - 『Oracle Application Server リリース・ノート for Microsoft Windows』
- Oracle WSM をインストールするコンピュータが第 2 章「要件」に記載されている要件を満たしていることを確認します。
- 第 3 章「インストール・タスク」の手順に従います。

2

要件

Oracle Web Services Manager をインストールする前に、コンピュータがこの章に記載されている要件を満たしていることを確認してください。

- システム要件
- グローバリゼーションおよびフォント
- ポート
- インストール・ユーザー
- 環境変数

システム要件

Oracle Web Services Manager をインストールする前に、ホスト・マシンが表 2-1 にリストされている要件を満たしていることを確認してください。

Oracle Web Services Manager には次のソフトウェアが必要です。

表 2-1 システム要件

項目	要件
オペレーティング・システム	Linux: <ul style="list-style-type: none"> ■ Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 ■ Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 ■ SUSE Linux Enterprise Server 9 Windows: <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Windows 2000 Service Pack 3 以上 ■ Microsoft Windows Server 2003 (32-bit) Service Pack 1 以上 ■ Microsoft Windows Server 2003 R2 ■ Microsoft Windows XP Professional Service Pack 2 以上
ホスト名	ホスト名は 255 文字以下にする必要があります。
プロセッサ速度	最小: 300MHz 以上の Intel Pentium プロセッサ。 推奨: 1GHz。
メモリー	512MB 以上
ハードディスク	512MB 以上の空き領域
ファイルシステム・タイプ	Windows では、FAT32 または FAT ファイルシステム・タイプよりも NTFS の使用をお勧めします。NTFS には、ファイルに対する権限の制限を設定するなどのセキュリティ機能が含まれているためです。
モニター	256 色表示機能
サポートされているブラウザ	Oracle WSM では次のブラウザがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Internet Explorer 6.0 SP2 (Microsoft Windows の場合のみ) ■ Netscape 7.2 ■ Mozilla 1.7 ■ Safari 1.2、2.0 (Apple Macintosh コンピュータ) ■ Firefox 1.0.4 (http://www.mozilla.org からダウンロードできます)。

グローバル化およびフォント

Windows システム上で、英語以外の言語で Oracle WSM を使用するには、Unicode フォントを使用する必要があります。Oracle WSM を使用するすべての Windows システムの Fonts フォルダに、ARIALUNI.TTF フォント・ファイルを置きます。最新の Windows システムでは、このフォルダは C:\WINDOWS\Fonts にあります。

ポート

次の表には Oracle WSM で使用するデフォルトのポートがリストされています。これらのポートは、Oracle WSM コンポーネントをホストするすべてのマシンで使用可能である必要があります。

表 2-2 Oracle WSM のデフォルト使用のポート

ポート	インストール・タイプ	説明
1531	基本	組込みの Oracle Lite データベース・ポート
3115	基本	組込みの OC4J HTTP リクエスト・ポート
3118	拡張および基本	RMI レジストリ・ポート
3121	基本	OC4J バンドル・バージョン用の管理ポート
3122	基本	JMS ポート
3123	基本	SSL JMS ポート

Oracle WSM 構成ファイルのポート設定値を変更することで、デフォルト・ポートを変更できます。ポート番号を変更する場合は、変更の影響を受けるすべてのコンポーネント・インスタンスに関連付けられた構成ファイルも必ず変更してください。

関連資料： ポートの詳細は、『Oracle Web Services Manager デプロイメント・ガイド』を参照してください。

Windows または Linux で `netstat` コマンドを実行すると、ポートが使用中かどうかを確認できます。

Windows の場合

次を入力します。

```
C:\> netstat -an | find "portnum"
```

ポート番号を二重引用符で囲んでください。

Linux の場合

次を入力します。

```
$ netstat -an | grep portnum
```

インストール・ユーザー

Windows 上での基本インストールでは、インストールで使用するアカウントに、ホスト・マシンにサービスをインストールするための権限が必要です。Windows または Linux 上での拡張インストールでは、インストール・ユーザーは Oracle Application Server をインストールしたユーザーと同じである必要があります。

環境変数

Oracle Web Services Manager をインストールするオペレーティング・システム・ユーザーは、次の環境変数を設定する（または設定しない）必要があります。

表 2-3 環境変数の要約

環境変数	設定または設定解除
ORACLE_HOME および ORACLE_SID	設定しない。
PATH	1023 文字以下にする。
TNS_ADMIN	設定しない。
TEMP (Windows)	オプション。設定しない場合、デフォルトは C:\temp。

Linux の場合、PATH 変数に chmod および uname を含むディレクトリが含まれていることを確認します。

インストール・タスク

この章では Oracle WSM のインストール方法を説明します。このインストールでは、各 Oracle WSM コンポーネントの単一のインスタンスを単一のマシンに配置します。インストールを実行すると、Oracle WSM を他のホストにインストールすることで、Oracle WSM のデプロイを拡張できます。

この章には次の項があります。

- [拡張インストール用のデータベースの準備](#)
- [インストール・プロセスの開始](#)
- [Oracle インベントリ・ディレクトリ](#)
- [Oracle Web Services Manager のインストール](#)
- [Oracle WSM の削除](#)

拡張インストール用のデータベースの準備

Windows 上で基本インストールを実行する場合は、この項をスキップしてください。

Linux にインストールする場合または Windows 上で拡張インストールを実行する場合は、SOA スキーマ ORAWSM をロードして既存のデータベースを準備する必要があります。

既存のデータベースは次のいずれかである必要があります。

- Oracle9i リリース 2 (9.2.0.7) 以上
- Oracle Database Express Edition 10g リリース 2 (10.2.0.1)
- Oracle Database 10g リリース 2 (10.2.0.2) 以上

SYSDBA 権限を持つ SYS ユーザーとしてデータベースにアクセスできる必要があります。

データベースに Oracle SOA Suite スキーマをロードするには、次のようにします。

1. Oracle データベースがインストールされているマシン、または sqlplus がインストールされておりデータベースにリモート接続できるリモートの Oracle クライアントにログインします。
2. ORACLE_HOME 環境変数を、sqlplus が含まれているインスタンスに設定します。
3. 次のようにして、SYSDBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続できることを確認します。

```
ORACLE_HOME/bin/sqlplus "SYS/SYS_PASSWORD@SERVICENAME as SYSDBA"
```

4. Oracle SOA Suite のディスク 1 で、irca.sh コマンド (**Linux**) または irca.bat コマンド (**Windows**) を検索します。

ダウンロードおよび解凍した場合は、インストール・ディレクトリで次を実行します。

```
cd INSTALLATION_DIRECTORY/Disk1/install/soa_schemas/irca
```

CD-ROM からインストールする場合は、ディスク 1 を CD-ROM ドライブに挿入して次を実行します。

```
cd mount_point/install/soa_schemas/irca
```

5. **Linux の場合：**

次のように、irca.sh コマンドを実行します。

```
./irca.sh
```

Windows の場合：

次のように、irca.bat コマンドを実行します。

```
./irca.bat
```

6. スキーマの追加を求められたら、ORAWSM と入力します。
7. コマンドが正常に完了すると、必要な SOA スキーマがデータベースにインストールされます。詳細は、irca.sh コマンドと同じディレクトリにある README.txt ファイルを参照してください。

インストール・プロセスの開始

次のようにインストール・プロセスを開始します。

1. 3-4 ページの「[インストール・ユーザー](#)」に記載されているように、インストール・ユーザーとしてログインします。
2. CD-ROM または DVD を挿入します。

注意: Linux で CD-ROM または DVD のマウントに失敗した場合は、『Oracle Application Server インストレーション・ガイド for Linux x86』またはオペレーティング・システムのマニュアルに記載されているマウント手順に従ってください。

3. インストーラを起動します。

Windows の場合は `Disk1\setup.exe` です。

Linux の場合は `Disk1/runInstaller` です。

Oracle インベントリ・ディレクトリ

Oracle Web Services Manager がコンピュータに最初にインストールする Oracle 製品である場合、インベントリ・ディレクトリ (oraInventory ディレクトリとも言います) を指定するための画面が表示されます。このインベントリ・ディレクトリは、インストーラがコンピュータにインストールされたすべての Oracle 製品を把握するために使用します。インベントリ・ディレクトリは、Oracle WSM および Oracle Application Server の Oracle ホーム・ディレクトリとは別のものです。ホーム・ディレクトリには適切な権限がないことがあるため、Oracle ユーザーのホーム・ディレクトリをインベントリ・ディレクトリとして使用しないでください。

コンピュータに Oracle 製品がすでにインストールされている場合は、既存のインベントリ・ディレクトリが使用されます。そのディレクトリへの書き込み権限があることを確認してください。これを確認する最もよい方法は、既存の Oracle 製品をインストールしたオペレーティング・システム・ユーザーと同じユーザーとしてインストーラを実行することです。Oracle 製品のインストールに関するすべてのタスクを実行するためのオペレーティング・システム・ユーザーを作成することをお勧めします。

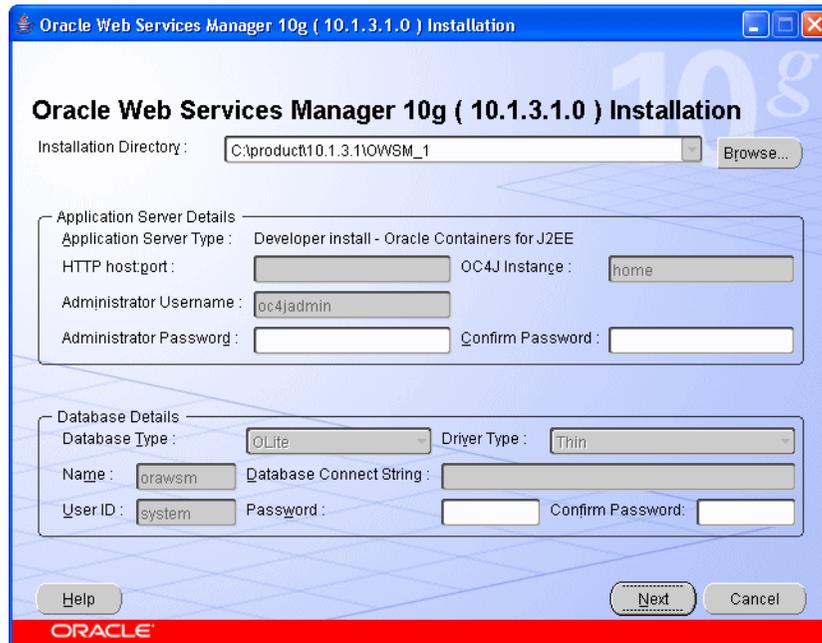
Oracle Web Services Manager のインストール

次の手順に従います。

1. インストール・ディレクトリとインストール・モードを選択します。

図 3-1 は Oracle Web Services Manager 10g (10.1.3.1.0) インストール画面を示しています。

図 3-1 Oracle WSM のインストール画面



この画面では、Oracle Web Services Manager 10g (10.1.3.1.0) をインストールするディレクトリを指定する必要があります。新規ディレクトリを指定すると、Oracle Universal Installer は基本インストールを実行します。既存の Oracle ホームを指定すると、拡張インストールを実行します。既存のインストールが存在するシステムの場合は、リストから選択できます。「参照」をクリックしてファイルシステムを参照します。既存のインスタンスは、Oracle Application Server 10g リリース 3 (10.1.3.1) 以上である必要があります。

注意： Oracle WSM の基本インストール・タイプおよび拡張インストール・タイプは、それぞれ開発者インストールおよび本番インストールと呼ばれることがあります。Oracle Web Services Manager 10g (10.1.3.1.0) インストール画面の「アプリケーション・サーバー・タイプ」は、新規ディレクトリを指定すると Developer install と表示され、既存の Oracle ホームを指定すると Existing Oracle AS 10.1.3.1 と表示されます。

2. アプリケーション・サーバーの詳細を入力します。

初期画面のアプリケーション・サーバーの詳細セクションには次のフィールドがあります。

■ アプリケーション・サーバー・タイプ

これは変更できない情報フィールドです。「**基本インストール**」または「**拡張インストール**」、および「**Oracle Containers for J2EE**」と表示されます。

■ HTTP ホスト:ポート

基本インストールの場合、このフィールドは無効化されています。現在のシステムをホストとして使用し、ポートは 3115 を使用します。拡張インストールの場合は、完全修飾ホストおよびサービス・インスタンス用の HTTP リスナーのポートを指定します。形式はホスト:ポートです。

■ OC4J インスタンス

基本インストールの場合、このフィールドは **home** に設定されており、変更できません。拡張インストールの場合は、アプリケーションをデプロイするインスタンスを指定します。

■ 管理者のユーザー名

基本インストールの場合、このフィールドは **oc4jadmin** に設定されており、変更できません。拡張インストールの場合、デフォルトは **oc4jadmin** ですが、別のユーザー名に変更できます。このユーザーは、共有ライブラリの作成と削除、およびアプリケーションのデプロイとアンデプロイの権限を持っている必要があります。

■ 管理者のパスワード

管理者のパスワードを指定します。基本インストールの場合、このフィールドでパスワードを設定し、次のフィールドで確認します。パスワードには次の制限があります。

- 5 文字以上であること。
- 30 文字以下であること。
- 少なくとも 1 文字が数字であること。
- パスワードには、データベース・キャラクタ・セットの英数字、アンダースコア (`_`)、ドル記号 (`$`) および番号記号 (`#`) のみを使用できます。
- パスワードの開始文字は英文字であること。パスワードの開始文字には、数字、アンダースコア (`_`)、ドル記号 (`$`) または番号記号 (`#`) は使用できません。
- パスワードを Oracle の予約語にすることはできません。『Oracle Database SQL リファレンス』に予約語がリストされています。このマニュアルは Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology/documentation>) にあります。または、単に予約語と思われる言葉の使用を避けることも可能です。

拡張インストールの場合は、現在の管理者パスワードを指定します。

■ パスワードの確認

基本インストールの場合、選択した管理者用のパスワードを確認します。拡張インストールの場合は、このフィールドは無効化されています。

3. データベースの詳細を入力します。

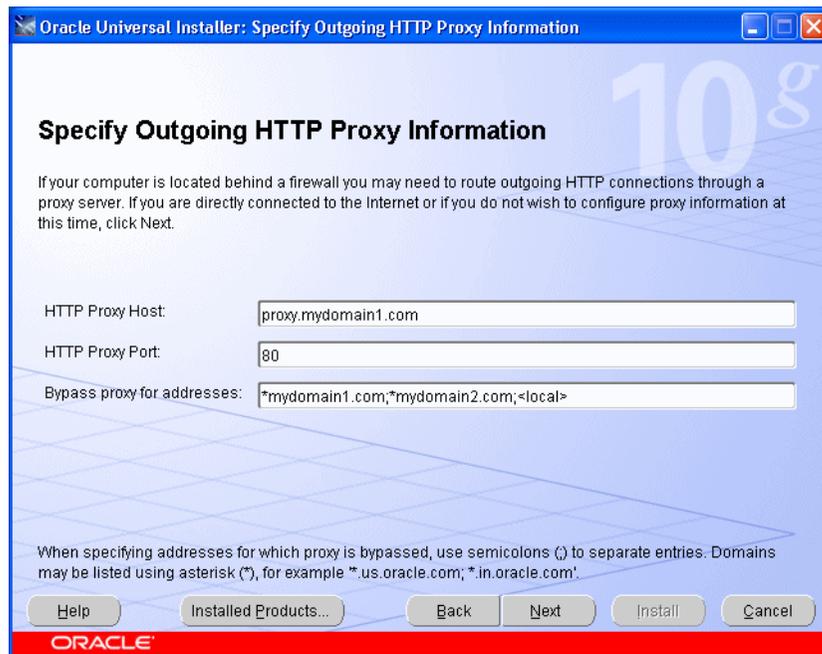
初期画面のデータベースの詳細セクションには次のフィールドがあります。

■ データベース・タイプ

Windows での基本インストールの場合、このフィールドは **OLite** に設定されています。Linux での基本インストール、および拡張インストールの場合は、このフィールドは **Oracle** に設定されています。このフィールドは変更できません。

- ドライバ・タイプ
OLite データベースの場合、このフィールドは **Thin** に設定されており、変更はできません。Oracle Database の場合は、JDBC ドライバ・タイプとして **Thick** または **Thin** を選択します。
 - 名前
OLite データベースの場合、このフィールドは **orawsm** に設定されており、変更はできません。Oracle Database の場合は、データベース・サーバー名を指定します。
 - データベース接続文字列
OLite データベースの場合、このフィールドは使用しません。Oracle Database の場合は、完全修飾ホスト名およびポートを指定します。単一のデータベース・サーバーの場合、形式はホスト:ポートです。RAC データベースの場合、形式はホスト 1:ポート 1^ホスト 2:ポート 2... です。
 - ユーザー ID
OLite データベースの場合、このフィールドは使用しません。Oracle Database の場合は、ユーザー ID (スキーマ) を指定します。デフォルトは **ORAWSM** です。
 - パスワード
OLite の場合、このフィールドでパスワードを設定し、次のフィールドで確認します。Oracle Database の場合は、指定したユーザーの現在のパスワードを指定します。
 - パスワードの確認
OLite の場合、選択したシステム・ユーザー用のパスワードを確認します。Oracle Database の場合は、このフィールドは無効化されています。
4. 「次へ」をクリックします。
 5. インストールの送信 HTTP プロキシ情報を指定します。

図 3-2 プロキシ情報の指定



コンピュータがファイアウォールの背後にある場合は、次の情報を指定します。

- HTTP プロキシ・ホスト

プロキシ・ホストの完全修飾名 (例: www-proxy.mydomain.com)

- HTTP プロキシ・ポート

プロキシ・ホスト上の接続ポート (例: 80)

- プロキシを経由しないアドレス

プロキシを経由しないアドレスのリスト。次に例を示します。

*mydomain.com; *mydomain2.com

ローカル・ホストは localhost または <local> として指定できます。

ブラウザでプロキシ情報を設定している場合、その情報が Oracle Universal Installer でデフォルトとして使用されます。図 3-2 は設定例です。

注意: プロキシ・ホストおよびポートを指定し、Oracle WSM アプリケーションが localhost インタフェース (デフォルト) を介してお互いに通信するように設定済またはこれから設定する場合、「プロキシを経由しないアドレス」フィールドで localhost を指定する必要があります。そうしない場合、localhost へのリクエストはプロキシ・サーバーに送られます。通常、これはエラーになります。

6. 「次へ」をクリックします。
7. インストールされる Oracle WSM コンポーネントのサマリーが、Oracle Universal Installer によって表示されます。「インストール」をクリックします。
8. 「インストール」画面およびそれに続く Oracle WSM Configuration Assistant 画面にインストールの進捗状況が表示されます。

注意: データベースの初期化中に、データベース内に表が見つからないというエラーが発生することがあります。これらのエラーは無視してかまいません。

関連項目: インストール・エラーの解決方法については、付録 B 「インストールのトラブルシューティング」を参照してください。

9. 「インストールの終了」画面が表示されたら「終了」をクリックし、表示されるダイアログで「はい」をクリックして確認します。

Oracle WSM の削除

Oracle Web Services Manager をアンインストールするには、次の手順を実行します。

1. `wsmadmin undeploy` を使用してすべてのアプリケーションをアンデプロイします。

関連資料： 詳細は、『Oracle Web Services Manager デプロイメント・ガイド』の `wsmadmin` に関する付録を参照してください。

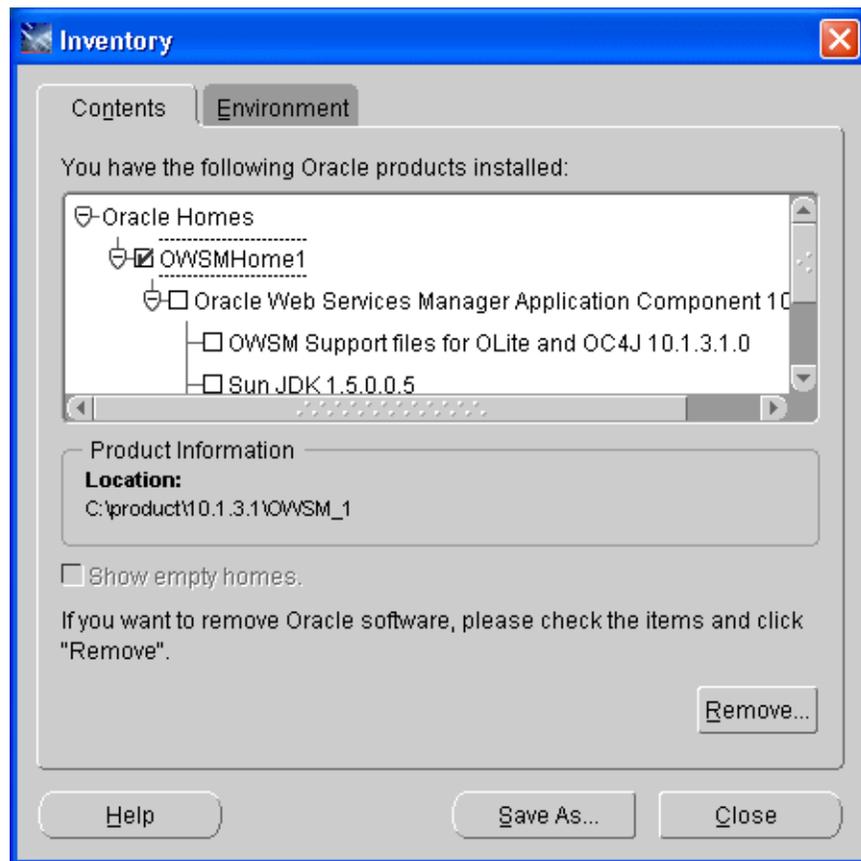
2. Oracle Web Services Manager のインストールを実行したユーザーとしてログインします。
3. CD-ROM または DVD を挿入します。
4. インストーラを起動します。

Windows の場合は `Disk1\uninstall.bat` です。

Linux の場合は `Disk1/runUninstaller` です。

5. 「インベントリ」パネルで削除するインスタンスを選択します。図 3-3 は、OWSMHome1 が選択された「インベントリ」パネルを示しています。

図 3-3 「インベントリ」パネル



6. 「削除」をクリックします。
7. 製品をアンインストールするには、次に表示される「確認」ダイアログで「はい」をクリックします。削除を取り消すには「いいえ」をクリックします。

ヒント： 「インベントリ」パネルを使用すると、Oracle Universal Installer の任意のインスタンスから Oracle 製品をアンインストールできます。削除する製品を選択して「削除」をクリックしてください。

8. プログレス・バーが表示されます。Oracle Universal Installer で製品のアンインストールが完了すると、選択して削除した製品は「インベントリ」パネルに表示されません。Oracle Universal Installer を終了します。
9. Oracle WSM をインストールした Oracle ホームを削除します。
10. 任意で、インストーラによってインベントリ・ディレクトリおよび一時ディレクトリに作成されたファイルを削除します。

インストール後のタスク

インストールの完了後に、デプロイを完全に利用できるようにするため、いくつかの追加設定タスクを実行する必要があります。

この章には次の項があります。

- [基本インストール後の Oracle WSM サーバーの再起動](#)
- [バックアップおよびリカバリの実行](#)
- [SSL の有効化](#)
- [地域および言語の設定](#)
- [JSSO の有効化](#)
- [次に実行する内容](#)

基本インストール後の Oracle WSM サーバーの再起動

Oracle WSM の基本インストールの完了後に、wsmadmin コマンドライン・ツールを使用して Oracle WSM サーバーを起動します。

注意： 同梱のアプリケーション・サーバーを個別に起動した場合、Oracle WSM は動作しません。

Windows の場合

コマンド・ウィンドウを開き、次のコマンドを実行します。

```
C:\> ORACLE_HOME\owsm\bin\wsmadmin start
```

Linux の場合

コマンド・ウィンドウを開き、次のコマンドを実行します。

```
$ ORACLE_HOME/owsm/bin/wsmadmin.sh start
```

関連資料： wsmadmin コマンドの詳細は、『Oracle Web Services Manager デプロイメント・ガイド』を参照してください。

バックアップおよびリカバリの実行

この時点が、ファイルのバックアップを開始し、バックアップおよびリカバリの計画を立てる最適なタイミングです。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

SSL の有効化

デフォルトでは、コンポーネントのほとんどが SSL 用に構成されていません。SSL を有効にする方法は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の SSL に関する項を参照してください。

地域および言語の設定

Windows の場合

アカウントの言語設定がシステムのデフォルト言語と一致していることを確認します。言語設定に基づき、NLS_LANG パラメータが自動的に Windows レジストリで定義されます。

インストール後にシステムのデフォルト言語を変更しないでください。変更すると、NLS_LANG パラメータと言語設定が一貫性のない状態になります。

Linux の場合

デフォルト・ロケールと NLS_LANG の設定を確認します。

デフォルト・ロケールが正しく設定されていることを確認するには、LC_ALL または LANG 環境変数が適切な値に設定されていることを確認します。現在の設定を確認するには、ロケール・コマンドを実行します。

```
prompt> locale
```

NLS_LANG の設定を確認するには、次のようにします。

1. NLS_LANG 環境変数の値が、オペレーティング・システムのデフォルト・ロケール設定と一致することを確認します。詳細は『Oracle Application Server グローバリゼーション・ガイド』およびこの変数を設定するファイルのリストを参照してください。これらのファイルで NLS_LANG 変数の値を編集する必要がある場合があります。

2. ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml ファイルの NLS_LANG 設定が NLS_LANG 環境変数と同一であることを確認します。

例: opmn.xml ファイルの NLS_LANG 設定は、次のようになります。

```
<environment>
  <variable id="TMP" value="/tmp"/>
  <variable id="NLS_LANG" value="JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS"/>
</environment>
```

JSSO の有効化

Oracle Web Services Manager と JSSO を併用する必要がある場合は、インストール後に次の手順を実行する必要があります。

1. コマンドラインで、ディレクトリを \$ORACLE_HOME/owsm/bin に変更します。
2. ファイル install.properties を編集します。
install.sso.support を true に設定します。

最後に wsmadmin deploy コマンドの実行を含めた手順があります。『Oracle Web Services Manager 管理者ガイド』および『Oracle Web Services Manager デプロイメント・ガイド』の内容を確認した後で、次の手順を実行できます。この手順は、『Oracle Web Services Manager デプロイメント・ガイド』の Oracle Web Services Manager Monitor に対する JSSO の有効化に関する項に記載されています。

関連資料:

- ポートの詳細は、『Oracle Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』を参照してください。
- wsmadmin deploy の詳細は、『Oracle Web Services Manager デプロイメント・ガイド』の Oracle Web Services Manager WSMADMIN コマンドに関する項を参照してください。

次に実行する内容

Oracle Web Services Manager をインストールした後は、『Oracle Web Services Manager 管理者ガイド』を確認する必要があります。特に、概要に関する章は必ずお読みください。

サイレント・インストールおよび非対話型インストール

この付録では、Oracle Web Services Manager をサイレント・モードでインストールする方法を説明します。この付録の内容は次のとおりです。

- サイレント・インストール
- 非対話型インストール
- インストール前
- レスポンス・ファイルの作成
- インストールの開始
- インストール後
- サイレント・インストールおよび非対話型インストールのセキュリティ上のヒント
- 削除

サイレント・インストール

サイレント・インストールではグラフィカルな表示がなく、ユーザーの入力もないため、Oracle WSM のインストールを監視する必要がありません。

Oracle WSM のサイレント・インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを指定し、コマンドラインで `-silent` フラグを指定して実行します。レスポンス・ファイルは、インストーラのプロンプトに対応する変数およびパラメータ値が含まれているテキスト・ファイルです。

Oracle Web Services Manager のサイレント・インストールは、同様のインストールを複数のコンピュータで実行する場合に使用します。また、リモートの場所からコマンドラインを使用して Oracle WSM をインストールする場合にも、サイレント・インストールを使用します。

非対話型インストール

非対話型インストールでも、Oracle Web Services Manager のインストールを自動化するためにレスポンス・ファイルを使用します。非対話型インストールでは、グラフィカルな表示があり、ユーザーが入力を行う場合があります。

Oracle Web Services Manager の非対話型インストールも、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを指定して実行します。しかし、コマンドラインで `-silent` フラグは指定しません。レスポンス・ファイルは、インストーラのプロンプトに対応する変数およびパラメータ値が含まれているテキスト・ファイルです。インストーラのすべてのプロンプトに対する応答を指定しない場合は、インストール中に情報を入力する必要があります。

インストール前

コンピュータに Oracle Application Server がインストールされていない場合は、次のタスクを実行する必要があります。

Windows の場合

次のレジストリ・キーおよび値を作成します。

- `HKEY_LOCAL_MACHINE / SOFTWARE / Oracle / inst_loc = Inventory_Directory`

`Inventory_Directory` はインストーラ・ファイルのフルパスです。次に例を示します。

```
C:¥Program Files¥Oracle¥Inventory
```

Linux の場合

開始する前に `theoraInst.loc` ファイルを作成します。

1. `root` ユーザーとしてログインします。


```
prompt> su
```
2. `/var/opt/oracle` ディレクトリが存在しない場合は、`root` ユーザーとしてディレクトリを作成します。


```
# mkdir /var/opt/oracle
```
3. `/var/opt/oracle/oraInst.loc` ファイルを作成します。このファイルでインストーラが使用するインベントリ・ディレクトリを指定します。

`vi` または `emacs` などのテキスト・エディタを使用して、ファイルに次の行を入力します。

```
inventory_loc=oui_inventory_directory
```

`oui_inventory_directory` は、インストーラでインベントリ・ディレクトリを作成するディレクトリのフルパスに置き換えます。次に例を示します。

```
inventory_loc=/opt/oracle/oraInventory
```

インストール・ユーザーがこのディレクトリの書き込み権限を持つことを確認してください。

4. 空の `/var/opt/oracle/oratab` ファイルを作成します。


```
# touch /var/opt/oracle/oratab
```
5. root ユーザーを終了します。


```
# exit
```

レスポンス・ファイルの作成

サイレント・インストールまたは非対話型のインストールを実行する前に、インストール固有の情報をレスポンス・ファイルで指定する必要があります。正しく構成されていないレスポンス・ファイルを使用してインストールを実行しようとすると、インストーラは失敗します。レスポンス・ファイルは、テキスト・エディタで作成または編集可能なテキスト・ファイルです。

インストーラの記録モードを使用したレスポンス・ファイルの作成

インストーラを記録モードで実行して入力内容をファイルに保存し、後でレスポンス・ファイルとして使用できます。この機能は、同一のインストールを異なるコンピュータで実行する場合に有用です。

インストーラを記録モードで実行するには、次のようにします。

1. `-record` および `-destinationFile` パラメータ付きでインストーラを起動します。

Windows の場合：

```
E:\> setup.exe -record -destinationFile newResponseFile
```

Linux の場合：

```
prompt> /path/to/runInstaller -record -destinationFile newResponseFile
```

`newResponseFile` は、インストーラで作成するレスポンス・ファイルのフルパスに置き換えます。次に例を示します。

Windows: `C:\myWSMResponse.rsp`

Linux: `/opt/oracle/myWSMResponse.rsp`

2. インストーラの画面で値を入力します。これらの値は、`-destinationFile` パラメータで指定されたファイルに書き込まれます。

「インストール」ボタンをクリックすると、すべての値が指定されたファイルに自動的に書き込まれます。このとき、このコンピュータでのインストールを完了することも、インストールを実行せずに終了することもできます。

パスワードなどのセキュアな情報はファイルに書き込まれないため、使用する前にレスポンス・ファイルを修正する必要があります。パスワードを設定するには、`sl_adminDialogReturn` パラメータを変更します。パラメータの記述については、生成されたレスポンス・ファイルを参照してください。

レスポンス・ファイルで変更する変数

すべてのインストールについて、少なくとも次の変数を変更してください。

```
UNIX_GROUP_NAME
FROM_LOCATION
ORACLE_HOME
```

レスポンス・ファイルの例

次に、Oracle Web Services Manager のサイレント・インストール用のレスポンス・ファイルの例を示します。

注意： サンプル・ファイル内の各パラメータ = 値についての説明をお読みください。その上で環境に合わせて値を編集してください。

```
#####
## Copyright (c) 1999, 2006 Oracle. All rights reserved.      ##
##                                                              ##
## Specify values for the variables listed below to customize  ##
## your installation.                                          ##
##                                                              ##
## Each variable is associated with a comment. The comment    ##
## identifies the variable type.                              ##
##                                                              ##
## Please specify the values in the following format:         ##
##                                                              ##
##          Type          Example                               ##
##          String        "Sample Value"                      ##
##          Boolean        True or False                       ##
##          Number         1000                                ##
##          StringList     {"String value 1","String Value 2"} ##
##                                                              ##
## The values that are given as <Value Required> need to be   ##
## specified for a silent installation to be successful.      ##
##                                                              ##
## This response file is generated by Oracle Software         ##
## Packager.                                                  ##
#####

RESPONSEFILE_VERSION=2.2.1.0.0

#-----
#Product Specific Values
#Please ensure the values are proper, as these are not validated, these are used
# as is
#-----
#-----
# Default locale to be used for OWSM
# Can be one of      "en","pt_br","fr","de","it","ja","ko","zh_cn","es","zh_tw"
#-----
sDefaultLocale="en"
#-----
# App Server type,
# This is "oracle-as" for UNIX
#-----
sAppServer="oracle-as"
#-----
# Version of App Server is 10.1.3 ( can be 10.1.3.1 )
#-----
sAppServerVersion="10.1.3"
#-----
# This variable indicates if a bundled OC4J is used
# If Installing on an existing OC4J home, set this value to false
#-----
bBundledOC4J=true
#-----
# This variable indicates if a bundled OC4J is used
# If Installing on an existing OC4J home, set this value to false
```

```
#-----
bDeveloperOC4J=true
#-----
# Host Name for Application Server
#-----
sASHostName=""
#-----
# Application server port
#-----
sASPort="3115"
#-----
# OC4J Admin ID
#-----
sASAdminID="oc4jadmin"
#-----
% OC4J Admin Password, in clear text
#-----
sASAdminPswd=""
#-----
# Application server Instance Name
#-----
sASInstance="home"
#-----
# Database type, current supporting only Oracle, for Unix
#-----
sDBType="Oracle"
#-----
# DB Driver type, thin/thick
#-----
sDBDriverType="thin"
#-----
# Database Host Connect String in the format: <host1>:<port1>[^<host2>:<port2>[...]]
#-----
sDBHost=""
#-----
# Database Name
#-----
sDBName=""
#-----
# Database User name
#-----
sDBUser="system"
#-----
# Database Password
#-----
sDBPswd=""
#-----
#Name      : UNIX_GROUP_NAME
#Datatype  : String
#Description: Unix group to be set for the inventory directory. Valid only in Unix
platforms.
#Example: UNIX_GROUP_NAME = "install"
#-----
UNIX_GROUP_NAME="g900"
#-----
#Name      : FROM_LOCATION
#Datatype  : String
#Description: Complete path to the products.xml.
#Example: FROM_LOCATION = "../stage/products.xml"
#-----
FROM_LOCATION="../stage/products.xml"
#-----
```

```
#Name      : FROM_LOCATION_CD_LABEL
#Datatype   : String
#Description: This variable should only be used in multi-CD installations. It includes
the label of the compact disk where the file "products.xml" exists. The label can be
found in the file "disk.label" in the same directory as products.xml.
#Example: FROM_LOCATION_CD_LABEL = "CD Label"
#-----
FROM_LOCATION_CD_LABEL=<Value Unspecified>
#-----
#Name      : ORACLE_HOME
#Datatype   : String
#Description: Complete path of the Oracle Home.
#Example: ORACLE_HOME = "C:\OHOME1"
#-----
ORACLE_HOME=<Value Unspecified>
#-----
#Name      : ORACLE_HOME_NAME
#Datatype   : String
#Description: Oracle Home Name. Used in creating folders and services.
#Example: ORACLE_HOME_NAME = "OHOME1"
#-----
ORACLE_HOME_NAME=<Value Unspecified>
#-----
#Name      : TOPLEVEL_COMPONENT
#Datatype   : StringList
#Description: The top level component to be installed in the current session.
#Example: TOPLEVEL_COMPONENT = {"oracle.owsm.core", "10.1.3.1.0"}
#-----
TOPLEVEL_COMPONENT={"oracle.owsm.core", "10.1.3.1.0"}
#-----
#Name      : DEINSTALL_LIST
#Datatype   : StringList
#Description: List of components to be deinstalled during a deinstall session.
#Example: DEINSTALL_LIST = {"oracle.owsm.core", "10.1.3.1.0"}
#-----
DEINSTALL_LIST={"oracle.owsm.core", "10.1.3.1.0"}
#-----
#Name      : SELECTED_LANGUAGES
#Datatype   : StringList
#Description: Languages in which the components will be installed.
#Component  : oracle.owsm.core
#-----
SELECTED_LANGUAGES={"en"}
#-----
#Name      : INSTALL_TYPE
#Datatype   : String
#Description: Installation type of the component.
#Component  : oracle.owsm.core
#-----
INSTALL_TYPE="Custom"
#-----
#Name      : DEPENDENCY_LIST
#Datatype   : StringList
#Description: List of dependees that need to be installed along with this product.
#Component  : oracle.owsm.core
# For installing into an existing home please have the dependency list as
# DEPENDENCY_LIST={"oracle.owsm.supportfiles:10.1.3.1.0", "oracle.jdk:1.5.0.0.5"}
#-----
DEPENDENCY_LIST={"oracle.owsm.supportfiles:10.1.3.1.0", "oracle.jdk:1.5.0.0.5", "oracle.o
c4j_extended:10.1.3.1.0"}
#-----
#Name      : sl_HTTPProxyInfoConfig
#Datatype   : StringList
```

```

#Description: HTTP Proxy Config.
#Component  : oracle.owsm.core
#-----
sl_HTTPProxyInfoConfig={"", "", ""}
#-----
#Name       : nValidationHTTPProxyInfoConfig
#Datatype  : Number
#Description: Validation of Connect Information.
#Component  : oracle.owsm.core
#-----
nValidationHTTPProxyInfoConfig=0
#-----
#Name       : nValidationASInfo
#Datatype  : Number
#Description: Validation of AS Info, This is ignored if the value is 0.
#Component  : oracle.owsm.core
#-----
nValidationASInfo=0
#-----
#Name       : nValidationDBInfo
#Datatype  : Number
#Description: Validation of Database Information. This is ignored if the Value is 0
#Component  : oracle.owsm.core
#-----
nValidationDBInfo=0

```

インストールの開始

インストーラでレスポンス・ファイルを使用するには、インストーラの起動時に、使用するレスポンス・ファイルの場所をパラメータとして指定します。

非対話型インストールを実行するには、次のようにします。

Windows の場合

```
E:¥> setup.exe -responseFile absolute_path_and_filename
```

Linux の場合

```
prompt> setenv DISPLAY hostname:0.0
prompt> runInstaller -responseFile absolute_path_and_filename
```

サイレント・インストールを実行するには、`-silent` パラメータを使用します。

Windows の場合

```
E:¥> setup.exe -silent -responseFile absolute_path_and_filename
```

Linux の場合

```
prompt> runInstaller -silent -responseFile absolute_path_and_filename
```

インストール後

非対話型インストールおよびサイレント・インストールの成功または失敗は、`installActionstime_stamp.log` ファイルに記録されます。また、サイレント・インストールでは、`silentInstalltime_stamp.log` ファイルが作成されます。

Windows の場合

ログ・ファイルは `C:\Program Files\Oracle\Inventory\Logs` ディレクトリに作成されます。

Linux の場合

ログ・ファイルは `oraInventory/logs` ディレクトリに作成されます。

インストールが成功した場合、`silentInstalltime_stamp.log` ファイルには次の行が含まれます。

```
The installation of OracleAS <Installation Type> was successful.
```

`installActionstime_stamp.log` ファイルには、それぞれの Oracle Application Server のインストール・タイプ固有の情報が含まれます。

サイレント・インストールおよび非対話型インストールのセキュリティ上のヒント

レスポンス・ファイルの情報の 1 つにインストール・パスワードがあります。パスワード情報はクリアテキストの状態です。

レスポンス・ファイル内のパスワードに関するセキュリティの問題を最小限に抑えるには、次のガイドラインに従います。

- レスポンス・ファイルに権限を設定し、サイレント・インストールまたは非対話型インストールを実行するオペレーティング・システム・ユーザーのみが読取り可能にします。
- 可能な場合は、サイレント・インストールまたは非対話型インストールの完了後に、システムからレスポンス・ファイルを削除します。

削除

インストールに使用したレスポンス・ファイルにサイレント削除パラメータを指定することで、Oracle Application Server のサイレント削除を実行できます。

インストールのレスポンス・ファイルで次のパラメータを変更します。

```
REMOVE_HOMES={"ORACLE_HOME_to_be_removed"}
```

次に例を示します。

Windows の場合

```
REMOVE_HOME="C:\oracle\ora_j2ee"
```

Linux の場合

```
REMOVE_HOME="/local_location/oracle_home"
```

サイレント削除を実行するには、コマンドの入力時に `-deinstall` パラメータを使用します。

Windows の場合

```
E:\> setup.exe -silent -deinstall -responseFile absolute_path_and_filename
```

Linux の場合

```
prompt> runInstaller -silent -deinstall -responseFile absolute_path_and_filename
```

インストールのトラブルシューティング

インストール中に問題が発生することがあります。この章には、そのような問題の解決に役立つ情報があります。

この章には次の項があります。

- [インストールの内容](#)
- [問題の解決](#)

インストールの内容

Oracle WSM のインストールは次の手順で構成されています。

1. Oracle Universal Installer によってユーザーが指定した情報が検証され、ファイルがインストールされます。作成されるファイルの 1 つが、`ORACLE_HOME\owsm\bin` にある `install.properties` です。
2. Oracle Universal Installer により、`install.properties` の内容に基づいてファイルを変更および作成する Oracle WSM コンフィギュレーション・アシスタントが起動します。
3. 基本インストールでは、コンフィギュレーション・アシスタントにより Oracle Containers for J2EE サーバーおよび Oracle Database Lite サーバーが起動および停止します。

問題の解決

この項では、Oracle Web Services Manager のインストール時に発生することがあるいくつかの問題を示します。

インストールを続行できない場合、通常は問題に関する情報を示したダイアログ・ボックスが表示されます。必要に応じてテキスト・フィールドをスクロールし、該当する情報を確認してください。場合によっては、問題を修正して「再試行」をクリックすると、インストールが正常に続行されます。

インストーラが表示されない

問題

Windows システムで、`setup.exe` の実行時にインストーラが表示されません。Oracle Database がマシン上で実行されています。

解決策

すでに Oracle Database が実行されている Windows コンピュータに Oracle Web Services Manager をインストールする場合は、次のオプションを使用してインストーラを起動する必要があります。

```
E:> setup.exe -J-Dsun.java2d.noddraw=true -Dsun.awt.nopixfmt=true
```

インストール中の接続の問題

インストール時によくある問題は、Oracle Application Server またはデータベースに接続できないことによるものです。

問題

Oracle Application Server への接続不可

解決策

拡張インストールでは、既存の Oracle Application Server が実行されていない場合にこの問題が発生することがあります。サーバーを再起動して「再試行」をクリックしてください。

解決策

資格証明が間違っているかインスタンス名が正しくない場合は、`install.properties` を更新してサーバーを再起動し、「再試行」をクリックしてください。

問題

データベースへの接続不可。

解決策

拡張インストールでは、既存の Oracle Database が実行されていない場合にこの問題が発生することがあります。データベースを再起動して「再試行」をクリックしてください。

解決策

資格証明、接続情報またはサービス名が正しくない場合は、install.properties を更新してサーバーを再起動し、「再試行」をクリックしてください。

関連資料：

- Oracle Application Server の再起動の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
- Oracle Database の再起動の詳細は、『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

失敗後のインストールの再開

問題

問題を修正するためにインストーラを終了する必要があり、その後インストールを再開します。

解決策

より複雑な問題を修正するために、Oracle Universal Installer を終了する必要がある場合があります。問題を修正したら、コマンドラインから Oracle WSM コンフィギュレーション・アシスタント (wsadmin) を実行してインストールを続行できます。コマンドは次のとおりです。

```
ORACLE_HOME\owsm\bin\wsadmin.bat install
```

Windows の場合

```
ORACLE_HOME/owsm/bin/wsadmin.sh install
```

UNIX の場合

注意： Windows の場合、Oracle Universal Installer は wsadmin.bat に -oui オプションを使用します。このオプションはログ・ファイルで確認できます。コマンドラインから wsadmin.bat を実行する場合は、-oui オプションを使用しないでください。

関連資料： wsadmin install コマンドの詳細は、『Oracle Web Services Manager デプロイメント・ガイド』を参照してください。

サード・パーティ・ライセンス

この付録には、Oracle Web Services Manager に含まれているサード・パーティ製品のライセンス情報が記載されています。

Openadaptor License

Copyright (C) 2001 - 2005 The Software Conservancy as Trustee. All rights reserved.

Permission is hereby granted, free of charge, to any person obtaining a copy of this software and associated documentation files (the "Software"), to deal in the Software without restriction, including without limitation the rights to use, copy, modify, merge, publish, distribute, sublicense, and/or sell copies of the Software, and to permit persons to whom the Software is furnished to do so, subject to the following conditions:

The above copyright notice and this permission notice shall be included in all copies or substantial portions of the Software.

THE SOFTWARE IS PROVIDED "AS IS", WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR IMPLIED, INCLUDING BUT NOT LIMITED TO THE WARRANTIES OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE AND NONINFRINGEMENT. IN NO EVENT SHALL THE AUTHORS OR COPYRIGHT HOLDERS BE LIABLE FOR ANY CLAIM, DAMAGES OR OTHER LIABILITY, WHETHER IN AN ACTION OF CONTRACT, TORT OR OTHERWISE, ARISING FROM, OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE SOFTWARE OR THE USE OR OTHER DEALINGS IN THE SOFTWARE.

Nothing in this notice shall be deemed to grant any rights to trademarks, copyrights, patents, trade secrets or any other intellectual property of the licensor or any contributor except as expressly stated herein. No patent license is granted separate from the Software, for code that you delete from the Software, or for combinations of the Software with other software or hardware.

索引

数字

256 色の要件, 2-2

C

CPU 要件, 2-2

I

installActions.log ファイル, A-8

J

JSSO

有効化, 4-3

JSSO の有効化, 4-3

N

NLS_LANG, 4-2

O

Oracle Universal Installer

表示されない, B-2

Oracle WSM サーバー

再起動, 4-2

Oracle WSM サーバーの再起動, 4-2

Oracle WSM のアンインストール, 3-8

Oracle WSM の削除, 3-8

oraInventory ディレクトリ, 3-3

S

silentInstall.log, A-8

SSL

インストール後の構成, 4-2

有効化, 4-2

SSL の有効化, 4-2

U

Unicode フォント, 2-2

い

インストーラが表示されない, B-2

インストーラの記録モード, A-3

インストール, 2-3

開始, 3-3

スタンドアロン, 1-2

インストール後の手順

サイレントまたは非対話型インストール, A-8

インストール中の接続の問題, B-2

インストールの開始, 3-3

インストールの再開, B-3

インストールのソフトウェア要件, 2-1

インストールのハードウェア要件, 2-2

インストールの問題, B-2

インストール・プロセス, B-2

インストール前の手順

サイレントおよび非対話型インストール, A-2

インストール・モード, 1-2

インストール・ユーザー, 2-3

インベントリ・ディレクトリ, 3-3

お

オペレーティング・システムのバージョン, 2-2

か

拡張インストール, 1-2

環境変数, 2-4

き

基本インストール, 1-2

け

言語設定, 4-2

さ

サイレント・インストール, A-2

インストール後の手順, A-8

インストール前の手順, A-2

削除, A-8

セキュリティ上のヒント, A-8

サイレントおよび非対話型インストールのセキュリティ上のヒント, A-8

削除

サイレント・モード, A-8

サポートされているアプリケーション・サーバー, 1-3

サポートされているデータベース, 1-3

し

使用するポート, 2-3

す

スタンドアロン・インストール, 1-2

ち

地域設定, 4-2

て

ディレクトリ
インベントリ, 3-3
データベースの準備, 3-2

は

バックアップおよびリカバリ
インストール後, 4-2

ひ

非対話型インストール, A-1, A-2
インストール後の手順, A-8
インストール前の手順, A-2
削除, A-8
セキュリティ上のヒント, A-8
ログ・ファイル, A-8

ふ

ファイルシステム・タイプの要件, 2-2
フォント
unicode, 2-2
ブラウザの要件, 2-2
プロセッサ速度, 2-2

へ

変数
環境, 2-4

ほ

ホスト名の要件, 2-2

も

モード
インストール, 1-2
モニターの要件, 2-2

ゆ

ユーザー, 2-3

よ

要件

オペレーティング・システムのバージョン, 2-2
ファイルシステム・タイプ, 2-2
ブラウザ, 2-2
プロセッサ速度, 2-2
ホスト名, 2-2
モニター, 2-2

れ

レスポンス・ファイル, A-2
記録モードを使用した作成, A-3
コマンドラインでの指定, A-7
作成, A-3
変更する変数, A-3
例, A-4

ろ

ログ・ファイル
非対話型インストール, A-8
ロケール, 4-2